

榎原均さんを偲ぶ

2024年11月9日 高原浩之(元ブンド赤軍派)

榎原均さんの「所有と労働の分離」という「資本主義批判」、それは、宇野経済学の「労働力商品化論」の批判が契機のようにですが、我々赤軍派にとっては、自らが起こした連合赤軍事件の自己批判と総括が問われた時、最大の導きになりました。

連合赤軍の根本には赤軍派の、革命の根拠と原動力に関する誤った路線があった。それを認識しました。

日本資本主義の内在的な矛盾に依拠せず、労働者階級の階級闘争を原動力にできなかった。ベトナム反戦と全共闘、学生運動に依拠しアジアの民族解放闘争からの外的波及で日本革命を展望してしまった(結果は破綻し「国際根拠地論」で国外逃亡)。

資本主義では、労働者階級が生産手段から分離し生産手段を集中した資本家階級に隷属している。生産の社会化と資本の生産手段独占、この生産力と生産関係の矛盾が社会革命を起こす。

社会主義は「労働と所有の再結合」である。隷属からの解放を求める労働者階級の階級闘争が、資本を収奪し生産手段を共有し生産を管理して社会主義を実現する。

「資本主義批判」でマルクス主義を学びました。連合赤軍事件は同時代の中国文化大革命(+カンボジア・ポルポト政権)の破綻と同質である。革命の根拠と原動力を誤れば観念論の主観主義になる。マルクス・レーニン主義はブルジョア革命からプロレタリア階級のヘゲモニーで資本主義の発展を経ずに社会主義革命へ前進しようとしたが、破綻した(ソ連も中国も資本主義化)。前途遼遠だが共産主義・社会主義の「ルネサンス」が必要である。

もう一つ。榎原均さんは「武装闘争は小なりといえども国家を組織する」と総括しましたが、これは連合赤軍事件の本質を認識する導きになりました。

絶対に「指導の誤り」レベルではない。「暴力的支配」である。破綻の末、指導者が組織を守り自分の地位を守ろうと、次々に「総括」の名でリンチを組織しリンチに動員した。

新左翼に根深い「内ゲバ」と「リンチ」を赤軍派はブンド第7回大会と7.6事件で実行した。その総括と清算をごまかし続け、とうとう連合赤軍事件になってしまった。

こういう想いで榎原均さんを偲んでいます。人生の終盤を迎えた今、「ルネサンス」に多少は役立つよう、頑張る決意でいます。(おわり)